
たっくまん

座布団

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たつくまん

【Nコード】

N0354A

【作者名】

座布団

【あらすじ】

東京都ばつとむ町。そこには宇宙の平和を守るために日夜戦う、正義の宇宙人が住んでいる。たつくまん、ひろきまん、じゅんぺまん、とつくまん、レイ。宇宙連盟府直属の機関、H-Rの一員である彼らは、凶悪宇宙人による犯罪を防ぐべく、割とのんきになりふりかまわず暴れまくる！！宇宙の話なのに妙にスケールの小さいSFアクションコメディ！！

ブローグ

彼らはいつたい、何者なのだろうか？ずっと思ってきた疑問だ。まず彼らの格好。

マントやらハチマキやら肩当てやら。挙げ句の果てには剣やらバズーカやら。

それ以前に、地球人ではないのではないか？そう思う。

だが、この町の人は何も言わない。

次に彼らの名前。

たつくまん、ひろきまん、じゅんぺまん、とつくまん、レイ……

なんだこの名前は。

ふざけてるのか。

入居願いの書類にこんなのが書かれてれば、不審に思うのは当然だろう？だが私の妻は、

「最近が変わった名前の子供も多いからねえ」

といって相手にしない。

何故だ。私がおかしいのか。…まあいい。私はただのアパートの管理人だ。たとえ庭先で真剣を振り回されたり、頭から出した（この時点でおかしい）バズーカで部屋を潰されたりしても、目をつぶってやる。また爆発音が聞こえる。いや、これはなんでもない。そうに違いない……。

プロローグ（後書き）

とり憑かれたように1日で書き上げた作品です。改行とかめちゃくちゃかもしれませんが、勘弁して下さい。

とある町の風景

「H・R」

という言葉がある。

ご存じだろうか。

まあ、知らないだろう。

言っておくがホームルームの事じゃない。

H・Rというのは、宇宙の混乱を防ぐために設立した、超巨大な規模の機関の名だ。

誰が何と言おうが真実だ。

彼らは密かに地球に潜り込み、宇宙人による犯罪を防ぐために活躍している。

これは、H・Rの一員として数々の事件を解決してきた、屈強な戦士達の、真実の物語である。

ひろきまんは幸せだった。

明るすぎるばつとむ町の町並みを窓から眺めながら、モーニングコーヒーなど飲んだりしていた。

久しぶりにゆつくり過ごしている気がする。

今はじゅんぺまんはトレーニングに行ってるし、レイは買い出しに行ってる。

とつくまんは…どこかに居るだろ、たぶん。

そして何より、たつくまんのアホが居ない。

奴が町をパトロールするのはそれはそれで不安ではあるが、あんなヘタレでもないよりはマシだろう。

それにこんな時間から馬鹿やる宇宙人もいるまい…。

いた。

窓から

見える大通りの一角が、ハリウッドアクションのノリで吹っ飛んだ。破片が四方に飛び散る。その中でもひととき大きな破片がこっちに向かって猛スピードで飛んできている。いや、あれは…たつくまんだった。

たつくまんは窓を軽く突き破ると、私に向かって狙ったかのように飛んできた。全く、朝から騒がしい奴だ。とりあえずやんわりと叩き落としておいた。

「ごふおっ!？」

床に叩きつけられるたつくまん。

痛そうではある。だがバネのように立ち上がると、私に詰め寄ってきた。

「テメー今わざとはたき落としたろ?!」

「いや、今のは避けきれないと思ってな…」

「嘘つけ!! 思っし冷静に対処してたぞ!!」

おお、対処とか難しい言葉使ってきた。

成長したな…何て感心してる場合じゃ無い。

「それよりお前、今回は何だ? STか? お前がただ単に騒ぎを起こしただけなら、今度こそお前捕まるぞ」

ちなみにSTとは、スペーステロリストの略だが、とにかく宇宙人には妙な連中が多い。

牛盗んだりわざとカメラに映ったり変なサークル描いたり。

そういうのはまだしも、もっとタチが悪いのを取り締まるのが宇宙連盟府直属のH・Rの役目だ。

「いや、今回は…じゃなくて今回もSTだ」

たった今突き破ってきた窓を見据えるたつくまん。

血まみれで焦げてなければそれなりにサマになるのかもしれないが

：

「そうか、なら急がないとまずいな」

私達はテレビの電源を切り、ガスの元栓を締め、戸締まりをきちんとして、最後にもう一度全部チェックした後、少しおやつを食べて大通りに向かった。

大通りは酷い有り様だった。

ビルは崩れ、アスファルトは念入りに砕かれていた。

この短時間にここまで破壊できるとは… というか、朝妙に明るかったのは火事のせいか？

「こらテメー！さつきはよくもブツ飛ばしてくれたなあ！！」

その三流悪役のようなセリフしか言えないボキャブラリー何とかならないのだろうか。

ともかく、騒ぎの原因は目の前にいた。

全身を黒いターバンのようなもので覆っており、手には《U / Z》製の爆薬、そして発火金属デクマイト。

宇宙人に間違い無い… というか、こんな奴どこから来たんだ？ターバン男が口を開いたようだ。

「来たな、H-R。恐れをなして逃げちまったんじゃないかと思つてヒヤヒヤしたぜ」

どうやらヒヤヒヤしてたらしい。最近こういう力試しをしたがる連中が増えて困る。

「さあ、これ以上町を壊すわけにはいかないな。お前はどつする、たつくまん」

「決まってるだろ、正面突破だ！！」

こんな事を真顔で言えるからコイツは凄い。

「うおおおおー！！」

突っ込んでいった。いつものパターンで行くと、たぶんキックしようとするだろう。

「グラインドキック!!」

普通の蹴りだ。

避けられた。

殴られた。

爆弾投げられた。

.....。

また私達のアパートに突っ込んだぞあいつ。

いい加減大家さんもキレるんじゃないか：ターバン男がこっちを向く。

「話にや聞いてたが、思った以上に弱えなあおめーら」

持っている爆弾をお手玉しながら楽しげに笑う。私もあんなふうに笑いたい。

「結論を出すのはまだ早い、後ろを見てみるんだな」

「?!」

ターバン男の背後で真紅のマントが翻る。

仲間の一人、じゅんぺまんのものだ。

じゅんぺまんの剣はターバンをわずかに削り、地面に突き刺さる。

「なっ...」

思わず口を開いてしまったらしい。

ターバン男が少なからず動揺しているのがうかがえる。

それもそのはず、今私が後ろを見ると言わなかったら、間違いなく剣は男を捉えていただろう。

じゅんぺまんは持ち前のスピードと技の多彩さで定評のある男だ。対人格闘では私以上かもしれない。そのじゅんぺまんが口を開く。

「もーひろきまんさあ今の絶対当たってたってマジでえ」

性格は割と軽い。

「...まあいいや、次は当てる!」

ターバン男が身構える。

じゅんぺまんの剣が閃… かなかった。

以前として地面に刺さったままだ。じゅんぺまんがボソツとつぶやく。

「…………… 抜けん」

辺りは静かになった。

…………… ちゅどーん。

じゅんぺまんは割と近くに落ちた。

彼の唯一の弱点、それは天性の運の悪さだ。

こればかりはトレーニングのしようがない。

これを打開すべく、最近風水に凝りだしたのだが。効果はまだないようだ。

「… ハハッ、驚かせやがって」

たぶん、ホッとしてるんだろう。

ターバン男が再びこつちを向く。

… やれやれ、私がやるしかないか… と思ったその時、

「ひろきまんさああん！！」

レイの声だ。

チーム最高の紅一点（と本人が言っていた）で新人H-Rだ。

ターバン男を弾き飛ばしてこつちに駆けてくる。

「今飛んでいったのじゅんぺまんさんですか？！」

確か買い出しに行つてたはずだが、買い物袋を持ってない。

「あ、買った物はとくまんに任せました」

… 何も言っていないんだが。

「レイ、じゅんぺまんを頼む」

私は肩当てを外し、それを重ねた。

両端から棍が飛び出し、武器になる。アーマーロッドという私の得物だ。

「分かりました、気をつけて下さいね！」

元気に駆けて行くレイ。

風に乗ってたまにはひろきまんさんの面倒見たいなあーとかなんとか聞こえる。

「くそっ！ふざけた奴等だ…」

弾かれたターバン男が腰を押さえて立ち上がる。

「ここまでコケにされちゃ、このダークマミーの名折れだぜ」
ターバン男はダークマミーというらしい。

…微妙だ。だがそんなことより、怒りだす前に決着をつけねばなるまい。決断は一瞬だった。数メートルを弧を描くように数歩で移動し、ロッドを左斜め下からダークマミーの首元に叩き込んだ。ターバンの隙間から見える瞳が驚愕に歪む。だが、浅い。何とか間合いをとるつもりなのか、勢いよく後ずさる。させない。

「ロッド・スプラッシュ」

エネルギー増幅により高速化した打撃が、ターバンを縦横無尽に打ち砕く。

さすがに、もう立てないだろう。

レイと文字通りミイラになったじゅんぺまんがやって来る。
いや、じゅんぺまんは無理矢理引きずられている。

私もそっちに向かおうとしたその時、背後で物音がした。
見ると、ダークマミーが仰向けになり、笑っている。

「へへ…油断したな、H・R」

ダークマミーの視線の先には、集まりだした野次馬がいた。
背筋が冷たくなった。まさか、爆弾を

「ヘエエッドバズーカアアア…!!」

爆風が辺りを包んだ。

今の声は…たつくまんだ。

どうやらダークマミーより先に攻撃したらしい。

そして、自分は巻き込まれたらしい。

爆風にもまれながらひろきまんは思った。

爆弾魔にバズーカ撃つな、ボケ…！気付いた時、ひろきまんは病院の一室にいた。

「お、起きた？」

最後のメンバー、とつくまんの声がする。

そうか、彼が後始末してくれたようだ。

話によると、たつくまんがダークマミーより先に攻撃したおかげで、民間の人に被害は出なかったらしい。

ケガの功名というやつか。とつくまんの隣にはレイが座っている。

「ひろきまんさん、リンゴ食べますう？」

すでに皮をむきはじめている。

「…君も割と爆発に近かったよな、大丈夫だったのか？」

レイはニツコリ笑って答えた。

「ええ。じゅんぺまんさんが守ってくれましたから」

確かあの時彼は気絶して…

「守ってくれたんです」

……じゅんぺまんは向かいのベッドで死んだように寝ている。

実際死んでそうな気がして恐くなったので、話題を変えた。

「そつえば、たつくまんは？」

またパトロールに行かされているらしい。あいつなら例えテポドンをくらっても1時間くらいで完治するだろう。

とりあえず、今回の騒動は終わったようだ。

毎度毎度、良く生きてるなと思う。

「皆のおかげですよ」

レイが天使のような微笑みで呟く。

……彼女とは話さず意思疎通出来るかもしれない。

だが実際、その通りだ。

これまで体験してきたいくつもの事件は、このチームでないと解決できなかっただろう。

とつくに死んでいたかもしれない。

いや、きっと死んでいた。

私をリーダーとして生かしてくれる皆に、改めて感謝すべきだろう。レイが切ってくれたリングはとても甘かった。

窓から見える夕焼けのぼつとむ町が、一層赤くなっていく気がした。

その時、窓から見えるビルの一つが突然ハリウッドアクションのノリで吹っ飛んだ。

破片が四方に飛び散る。

その中でもひととき大きな破片がこっちに飛んで来た。

もうだいたい察しはつくが……

たつくまんだった。

とある町の風景（後書き）

疲れました…でもまだ書きたい話はたくさんあります。誰か読んでくれる人がいたら嬉しいです。

ユーレイ大騒動・食卓編

「ユーレイだつてよユーレイ！」

開口一番、じゅんぺまんがそんなことを言った。
夕食の席での話だ。

ばつとむ町H・Rの皆でレイの作ったびっくり煮込みカレーを食べ
ている。

ちなみに僕にはししゃもが丸ごと入っている。
ビミョーなもん入れてるなあ、レイちゃん。

「そんでさあ、そのユーレイつてのがさあ……」

僕たちH・Rの大半は、各々担当の星に住み込みで仕事をしている。
ようするに単身赴任だ。宇宙規模のくせに地域性が強い。

更にH・Rは支部、支本部などが……

「……聞けコラア！！」

頭はたかれた。

どうやら僕に話してたようだ。
じゅんぺまんが顔を近づける。

「聞いてたか？！とつくまん！」

聞いてなかったわけじゃ無いんだけど……さて、どうするか。
ここで下手に答えるとまたはたかれる。

それとなく周りを見てみた。

ひろきまんはこないだの騒動の報告書に目を通している。
聞いてないというより聞こえてない感じだ。

レイはそんなひろきまんをぼーっと見ている。
さすが趣味はひろきまんと豪語するだけのことはある娘だ。
じゅんぺまんの話は…こつちも聞こえてないんだろう。
シカトしてるわけじゃないと信じたい。

たつくまんはホタテの次に嫌いなシイタケをどう処理するか考える
のに必死だ。
その中にちゃんと食べるという選択肢は無いんだろうな。

…なるほど。今日は皆じゅんぺまんの話に乗ってくれそうに無い
な。

とりあえず無難に返事しよう。

「はあ…ユーレイ？それがどうかしたの？」

じゅんぺまんは機嫌を直してくれたらしい。

大きくうなずき、机から身をのりだしてきた。

「何か最近、ここら辺で出るらしいぜ」

口の横に手を当て、内緒話のモーションをしてはいるが、ボリユー
ムは近所まで聞こえるレベルだ。

うるせえ野郎だ、と思ってはいけけない。これがこいつのキャラなの
だ。

「今日ジョディから聞いたんだけどさあ」

誰だそいつは。

と言いつつになつたがなんとかこらえた。ムダに話を長くする必要は無い。

ていうか外人……？

「ジョディが仕事の帰り、いつものように夜中のばつとむ町の通りを歩いていたら……」

「仕事つて？」

思わず口を開いて一瞬、無駄な質問をしたと思つたが、氣になつたからしかたがない。

「駅前の公園とかでたそがれてるサラリーマンに救いの手をさしのべるとかなんとか」

「…救いの手？」

また思わず口を開いて一瞬（以下略）

「史上最高の宗教メガハッピーハッスル教の信者にするんだと」

やっぱ聞かなきゃ良かった。

どんな友達付き合いしてんだこの男は。

まあ、友達選ばないのはある意味偉いかな…。

「んで、そのメガハッピー教のジョディさんがどんなアンビリバボーに遭遇したわけ？」

「ジョディが見たってわけじゃないらしいがな」

一度言葉を切る。話し方がこいつは上手い。

「今信者の中でユーレイを見たって奴等が異常に増えてんだと、んでそれと同じ頃から妙な事件も起きてて心配なんだって」

「妙な事件？」

「行方不明とか」

………
妙つつーか…

「…それが宇宙人と関係してると言いたいんだな」

あれ、ひろきまん聞いてたんだ。

いつの間にか報告書を置いてこつちを向いている。

「というより面白そうと思ってますね？」

レイが付け足す。

まあ、彼女が言うなら間違いはない、というかじゅんぺまんの顔見りや誰でも分かる。

「けどさ、違うんならそれで良し、ビンゴなら…」

捕まえる、と。確かに正論だ。

ひろきまんもうなずく。

「そうだな、明日あたりうかがってみるか」

「明日と言わず今日でよくね？」

いきなりたつくまんが言い出した。

シイタケ食いたくないだけだろお前は。

たつくまんを見る皆の目もそう行いたげだ。
レイがにっこり言う。

「ちゃんと食べろよ」

.....

静かな食卓になった。

ユーレイ大騒動・突入編

夜のぼつとむ町は微妙に静まりかえっていた。

ベッドタウンとしての機能が強いこの町は、静かでも人の気配が消える事はあまり無い。

だから恐怖の都市伝説みたいなのもできやすいといえやすいのかもしれない。

「ホントにいんのかよ、ユーレイなんて」

たつくまんが言う。無理矢理シイタケを食わされてご機嫌ななめの様子だ。

「一般的に言って可能性は低いだろう。見間違いか、あるいは精神及び肉体の疲労から来る軽度の幻覚症状か」

律義に答えるのはひろきまん。聞いた本人は意味分かってないけど。

「いずれにしろ話を聞いてみない限り何とも言えないな。一般的なんて言葉は…あてにならないからな」

ひろきまんの隣りをびったりマークしてるレイもうなずく。

まあ僕ら自体が一般的でないもんなあ。

宇宙人なんて地球人にとっちゃそれこそユーレイと同列だ。

僕らは今夕食を終えて例のメガハッピー教とやらの事務所に向かっている。

夜のぼつとむ町を5人並んで歩いてる僕らははたからみたら滅茶苦茶怪しいんだろうけど、気にしてるのは僕だけのようだ。

…しかし、幽霊か。

いるいないなんて僕には分からないけど、いたとしてもおかしいとは思わないな。

宇宙にも迷信じみた話が多い。

あり得ないと思えるものばかりだけど、何故か僕はそれを否定する気にはなれなかった。

「とつくまん？」

ふと気づくと、横からレイがのぞきこむようにこっちを見ていた。どうでもいいが、僕とたつくまんだけ彼女は呼び捨てだ。

「何考えてました？何かまた変なことですか？」

またってなんだ？

「いや、別に…何でもないけど」

「ふん……」

疑わしげにまだこっちを見ている。

彼女は人の心を読むのが得意だけど、僕には上手くないらしい。それがシヤクなんだろうか？

「着いたぞ」

少し先を歩いてたじゅんぺまんが振り向いて手を振っている。意外と歩いてたようだ。

人通りの多い所まで来ていた。

そこは駅前だった。

見たところテナントビルの三階にあるらしい。

麻雀やマッサージや駅前留学できるところに混ざって、《メガハッピー教》の看板がある…のだが。

「間違ってますん？あの看板」

レイがぼそりと言った。

『間違ってる』僕とひろきまんがハモった。

まず、文字がピンク。

んで、繁華街を思わせるネオン。

看板のすみにはマスコットキャラらしき不細工なネズミが描かれている。

宗教にマスコットとはいいい度胸してんなあ。

「…大丈夫だろうか？」

悩みグセのあるひろきまんはすでに頭痛がするらしく、頭を押さえてうめく。

「んでもいいーからよ、さっさと終わらせて帰ろっぜ」

たつくまんが言う。お前が行きたいつつたから今日来てんだけど…

「まあまあ、とりあえず中に入ってから話そうや」

じゅんぺまんが入り口を指差しながら言う。

「そうだね、今めっちゃ僕ら目立ってるし」

僕のセリフにたつくまんが

「そうかあ？」

とでも言いたげな顔をしている。

こいつは行き交う人の奇異の視線に気づいとらんのか…。

三階に上がりながら、僕は思ってた事を聞いてみた。

「怖くて聞けなかったんだけどさ、ヤバい宗教じゃないよね？」

新興宗教なんて最近は何事もないことの上ない。

「あのなあ、いくらなんでもそんなと友達にはならんだろ」

じゅんぺまんは呆れたと言わんばかりだが。なんせお前だからな…。

「んじゃ、教団とかこの事務所に来たことあるんだ」

「いや、無いが」

どっから来んだよその自信。

「ならやばいかどうか分かんないじゃん」

「ああもー、どうせもうすぐ分かんたろ！怖がんなって、腹くくれ

！！」

そういう事を言ってるんじゃない…

「そこまでだ。……着いたぞ」

ひろきまんの声だ。

じつと前を見据えている。

三階は静かだった。

ドアには《メガハツパイ教》と書かれたプレート。

表の看板と違い、いたって普通なものだ。

ピンクでも、ネオンでも、不細工なネズミでも無い。

「うーし、開けっぞ」

躊躇なくたつくまんがドアノブを回そうとする。
さすが怖いもの知らず。

こんな時の行動力はすごい。

廊下は意外なほどきれいだった。

なんというか、清潔さより不気味さが強い。

突き当たりは大きめの窓になっていて、今は誰かがこっちを見て笑っている。
……………。

「うおおわああ!??」

「なんだ、どうしたとつくまん?!」

ひろきまんが驚いてこっちを見ている。

すでに武器を構えているのが彼らしい。皆も僕を見ていた。

「今、窓の外に誰かいたんだよ」

皆も窓を見るが、当然窓にはもう誰もいない。

「……いないじゃねえか」

「見間違いないですか?」

「なんだよとつくまんビビってんなよ!」

うう……気のせいだったのかな? ちょっと窓の方に行ってみた。

心のどつかで怖がる自分がいたがそれは無視する。

窓の外はいわゆる路地裏というやつだった。

すぐそこにビルの壁があるが…足場になりそうなものは見当たらなかった。

おまけに落下防止のためか、それとも壊れてるだけなのか窓も半分しか開かない。

……………。……時間の無駄だな。人の気配も無いし。

「いやあごめん気のせいかも」

照れ笑いして戻った。

皆は改めてドアを開けようとしている。

予感がしていた。

見間違いなんかじゃない。
何かが僕らを見ていた。

今が今回の事件に関係あるんなら、あっちから出向いてくれるだろう。

恐怖のユーレイとやらが……。

ユーレイ大騒動・激動編

僕はこれまで生きてきて、宗教というものには得体の知れない不気味さを感じてきた。

ばつとむ町にやって来る前はH・Rの戦闘補給員をしていた。分かりやすく言えば戦争とかが起きた時に、補給部隊を守ったりする仕事なのだけど…おかげで嫌というほど地獄を見てきた。

宗教が原因で起きた大戦も数多くあった。

こいつはタチ悪くて、両方潰さねえと終わんねえんじゃないかってくらい長引く。

sonで何だか知らないけど信者の皆さんは他宗教の人にやたら冷たい。

何のための宗教なんだか…人を救うのが宗教じゃないかね。

……とはいえ、その宗教を心の支えに生き抜いている人達も沢山知っている。

そんなわけで、まるで宗教に踊らされてる気分なのであった。

だけど…このメガハッピーとやらは…

「いらっしやあゝい」

ドアを開いた途端、ずらりと並んだ女の人達。

部屋は薄暗くて、なんともいえない怪しさが爆裂四散してる。

う、うさんくせえ…

これには幾多の戦いをぐぐりぬけてきたばつとむH・Rの皆も言葉が出ない。

「……………何だ？これは」

ひろきまんがたつぷりと間を置いてつぶやく。

この人はこーいうとこに全く馴染みなんて無いはずなのに、動じたような感じが少しも無い。

「みたときヤバクラな感じですねえ。ホントにここなんですか？
…じゅんぺまんさん」

ドアに名前があるのだからここで間違いない。

それなのにこういうことを聞くのは非難してる証拠だろう。
もしくはからかってる？

当のじゅんぺまんは彼自身予想外だったらしく驚いてるようだ。

「あ、あのさあ…君達、ジョディで人知らない？俺らメガハッピー
教の事で来たんだけど」

並んでる娘たちに話しかけると、真ん中の娘が口を開いた。

「ええ、店長から聞いてますよ。だからお出迎えしてるんです。さ、中へどうぞ」

どうやらジヨディは店長をしてるらしい。

怪しい店内…なのか事務所内なのか…どっちでもいいけど。

とにかく中に入ると、前髪のカールした大人っぽい女性がソファーに座っていた。

「おう、ジヨディ！お前店長だったんだなあ！」

「あら、ずいぶん早いわね。早くても明日だと思ってたのに…」

この人がジヨディか…ホントどこでこんな人と知り合っただろ？いや、それより…

「どー見ても日本人だな」

たつくまんが言う。

「…確かに。てっきり外人だと思ってた」

宇宙人が外人とか言える立場じゃないが。

「ふふ…ジヨディって名は新名って言うてね、メガハッピーで改名

したの。昔は普通の名だったわ」

なるほど…そういうのよくあるな。たつくまんも納得したらしい。
「なるほど。カルーセルなんたらて奴が名前変えたみてーなもんか」

それは何の関係も無い。

ジヨデイが艶っぽい笑みをたたえて話しかける。

「立ち話もなんだから、奥にある事務所用の部屋で話しましょう？」

てなわけで皆で奥の部屋に行った。キャバクラ兼事務所なのかな？

「私達今困ってるの」

いきなりそうきりだしてきた。

確かに事務所用というだけあり落ち着いた内装だ。

後ろで並んでるお姉さん達が果てしなく不自然だが。

「うちの信者が何人も失踪してるの。店の皆も幽霊を見たっていうし…」

僕の脳裏についさつき見た窓の人影が浮かんだ。

ユーレイ、ね……。

「私達けして楽な暮らししてるわけじゃないわ。教団の運営にはお金がかかる。だからこういう真似もしてる」

「寄付みたいなのさせないんすか？」

思わず口が開いた。

ジヨディはどことなく陰のある顔をこちらに向ける。

「してないとは言わないわ。でも元がリストラされた人ばかりだから……」

ふうん……珍しい教団だな。

キャバクラはどうかと思うけど。

「……経営に関して私達がしてやれることは何もありません。残念ですが」

ひろきまんが口を開く。

「友人の仲間にそこまでさせようとは思ってないわ、でもあなた達探偵なんでしょ？今回の事件……調べてくれないかしら」

はあ……タンテーねえ。適当なこと言ってんなじゅんぺまん。

とはいっても他にいい嘘思いつかないけど。

「もちろんだつて！そんなユーレイ野郎俺がぶった斬ってやる！」

がばつと立ち上がるじゅんぺまん。

後ろでお姉さんがたがキャーとかカッコイイとか言っておられる。さすがおだてるのが仕事のだけはある。

そんなのは無視して話は進んでいた。

「どうします？ひろきまんさん」

「どうにも見えない部分が多いが……まあいいさ。私達が調べればい

いだけの話だ」

結論が出たようだ。

「いいでしょうジョーディさん。引き受けます。報酬もいりません」

「本当？良かった。これ以上信者を失うわけにはいかないわ、お願いね」

話は決まった。んじゃ明日から…

「うっしやじゃー今から調べにいくぜえ皆！」

はい？

「い、今からあ？！」

またこんなこと言い出すしこの不運剣士は。

風水の効果どうせ全然ねーんだろ…って関係無いか。

「もういいじゃんかじゅんぺまん。明日からにしようよ」

時刻はまもなく深夜だ。

「バーローとつくまんでめーユーレイを夜調べねーでいつ調べんだよ！ー！」

そう言われればそんな気もするが…

「善は急げだ！先行ってるぜ皆あー！うおおおおお………」

ドアをぶつとばして走ってってしまった。詳しく聞いてないのに……しばらくしてたつくまんが口を開いた。

「ドコ行くんだったアイツ？」

………確かに。

ユーレイ大騒動・哀愁編（前書き）

ヤバいくらい間が開いてしまいました。何かノリが変わってしまっているかもしれません。

ユーレイ大騒動・哀愁編

「何なんだよ全く…」

ああ、いかん。なるたけ愚痴らないようにしてるのに…。
しかし止まらん。帰ってゲームしたかったのになあ…。

「どこいったの？じゅんぺまん」

ここぼつとむ町も一応東京のはしくれだけあって大通りは人多い。
雑踏の中人を探すのはたとえ対象が赤マントで帯刀してる野郎でも
難しいだろうなあ。

「手分けして探すしか無いな。各自幽霊について聞きこみをしながら
らやってくれ」

ひろきまんが妥当な指示を出す。聞きこみか…苦手だなあ。

「私は北の大通りに行く。とっくまん、後は頼む」

颯爽と向かうひろきまん。かっこいい人だなホント。
「んじゃ、オレあ西んアーケードいくわ」

のこのこ歩いてくたつくまん。

まあ大丈夫…かな。聞きこみならあいつの方が上手いだろうし。

「じゃあ…あたしは東…で」

渋い顔で遠くを見るレイ。

視線の先にはひろきまんがいるのは間違いないな。

「北に行くなよ」

「大丈夫ですよ。……はあ」

レイはトボトボ歩いていった。

…さて、僕も行くか。

「南か…」

南には特に何があるわけでも無い。

ばつとむ町らしく適当に店やら家やら並んでるだけだ。

む、若い男発見。コンビニ帰りだな？

聞きこみしてみるか…気は進まないけど。

「えーっと、すみません。聞きたいことが…」

若い男がこつち見た。

「んあ？んだよテメーウゼえな」

んー、まあそうだよな。夜中だしな。うんうん。

「あのですね、最近ここらで行方不明事件がありまして……」

「邪魔だつつつてんだろコラぶつ飛ばすぞどけ」

かなりメンチ切ってくんなこの兄ちゃん。聞く奴間違つたな…。

兄ちゃんは僕をはねとばして逃げようとする。

せつかく声かけたんだからこつちも退くに退けない。

「なんか知りませんか？幽霊が出るみたいなウワサとか……」

と、突然兄ちゃんは振り向いて胸ぐらを掴んできた。

「うつせえぞボケが、殺されてえのか！ああ？！」

……むむ、しかたないなあ。

僕は兄ちゃんのすねを蹴りとばし、回り込んで腕を折れる寸前まで

ひねり上げた。

たまらず倒れ込む兄ちゃん。

持ってた買物袋も落としてしまった。中身は焼きそばUSO。

幸い大通りからはだいぶ離れてたので、辺りに人の気配は無い。

さらに声をあげさせないために口を腕できつく絞める。

「うるせえのはお前だよ、少しは話聞けや」

むーむー唸る兄ちゃん。

「んー？何だ？何言ってるのかわかんねえぞ、ん？」

少しだけ腕に力を入れた。

さらに絞まる。兄ちゃんのむーむー声がさらにヒートアップする。

.....。

なーんて上手く行ったらいいんだろけど僕にはそんな真似できませんのよ皆さん。

え？今？うんまだ胸ぐら掴まれたまんま。だから腕捻ったり締め上げたりしてない。

ほら、

「うわっ」

とか言って引いた人たちが帰って来てくれ、頼むから。

とか脳内で意味分からんイメージが膨らみながらも流石に胸ぐらを

掴まれるのはきついので僕はとりあえず答えた。

「あ、すいません。邪魔でしたよねホント。何でもないです」

愛想笑いを浮かべて呟けば、兄ちゃんはケツとか分かりやすい悪態をつきつつ乱暴に手を放した。

「うつぜえなマジで」

と一言吐き捨てて此方を少し睨みつけながら去っていく。

うーん殴りたい。青キャンかけて17分割したい。

「…まあ、そんな真似できないけど」

ぶつくさ言いながら僕は再び夜の街へと溶けて行き……表現がアレだな何か。

僕が夜遊びしてるみたいだなコレ。

言っとくけど僕はとても真面目な人なので誤解の無いように。自分で言う奴は胡散臭い？黙れ。

そんな感じでおっかなびっくり聞き込みを開始して早小一時間。ぶっちゃけダルい、眠い。

そもそも良心的に協力してくれる人自体あんまりない訳で……たまたまに話聞いてくれる人がいても幽霊の事なんて誰も知らんがな父さ

ん。

親父会った事無いけど。

とか何とか聞き込みも放棄してぼーっとしつつ歩いていたら、いつの間にかニユースリポーターが歩いていそうな閑静な住宅街に来ていた。ノリコさんは見当たらないが。

軽く溜め息をついて見回せば、辺りは真っ暗。

闇を押しつけるには心もとない街灯の青白い光が遠くでチカチカと不定期に点滅している。当然人気は無い。

肌寒い…不意にそう感じた。まあ夜中なんだから仕方ないっちゃ仕方ない。

腕をさすりつつ、ふと思いついたように懷から通信機を取り出す。皆はどうしているだろう、まあ今日は収穫無しだろうけど。とかいがかじゅんぺまんのアホは見つかったんだろうか…

通信機を耳に当てると、無意識に視線は前へと向く。

ごく自然な流れで通信機のスイッチを入れ……

なかった。

振り向き、通信機を仕舞うとその手で刀身の無い剣の柄のような物を取り出す。

「やっと来たか…」

ぼそりと呟くと路地の隅からゆつたりとした動きで黒装束の男…ええと、多分男が現れる。顔は分からない。

「いつから気づいてたんです？」

頭巾の下で僅かに笑いを漏らしながら尋ねてくる。

何が面白いんです？何でこう敵って奴はイヤな笑いをする奴ばっかなんだろ。

僕は無言で柄を握り締める。柄の周りの空間が一瞬歪む。

次の瞬間には、六角形の金属棒：鉛筆のような刀身が現れていた。通称ペンシルソード。剣としての切れ味は皆無だが様々な機能を備えている。

「…行方不明の人達を何処にやった」

両手で握り刃先を真つ正面に構えながら呟く。
正直つけられている事など気づいてなかった。

やっと来たか、というのは予感の事だ。これから起こり得る事の一連の予感。

「私の質問は無視ですか？ま、あの無警戒振りを見れば大体は分か

りますからいいですけど。行方不明…さあて、何処でしょうね。明後日位には出荷されるのかな？」

額を大仰に押さえ、空惚けた口調でケラケラと笑う。

「…人身売買か」

苦々しく言葉を絞り出す。手にも力が当然入る。

地球という惑星は宇宙全体から見ればちっぽけな辺境惑星だ。だがその資源の豊富さと、発展途上の文化を持つ人類が住まう地球は、STならずとも利用価値があり、魅力的だった。

だから宇宙連盟府は地球への過度の干渉を防ぐ為に保護、規制を徹底しているんだけど、それは地球の産物の希少価値を高める結果も招いてる、と。

要するに地球人が裏ルートで高値で取引されてるワケで。鑑賞用、研究用とか色々あるらしいけどとにかく外道には違いない。

「ホントこんな奴ばっか…」

忌々しく吐き捨てる。黒装束は肩を竦め、言い返す。

「それは此方の台詞です。良いじゃないですか地球人の10匹や20匹、大した数じゃないですよ。」

それを貴方方は几帳面に規制して下さって…ねえ？H-I-R。何処の

惑星に行ってもゴキブリのようにウジャウジャウジャ…邪魔なんだよ!!」

言い終わると同時、突っ込んできた。

極々普通の突進だけど…速い!

思い切り上体を屈めた体勢から、僕の肩辺りに向けて右の抜き手で突きを放ってくる。

迎え打つ事は避け、左斜め前に半身をずらして突きをかわす。

すれ違う時に分かったが実は抜き手ではなく指の間に針を挟んでいた。

卑怯だなんて言うつもりは毛頭無いけど、やっぱり性格悪いなコイツ。無防備な側面から反撃しようかとも思ったが、とっさの判断で一歩後ろに飛ぶ。

お互い、一瞬前と位置が入れ替わった状態で硬直し、対峙する。

「へえ、よく見えてましたね?」

黒装束がヒラヒラと左手に持った短刀を振る。右脇の下からこっちを刺すつもりだったらしい。

「いや、何となく」

本気で何となくだ。だって予感だから。

「大したゴキブリですね。H I Rには勿体無い人材が沢山埋もれていて非常に残念ですよ」

楽しみに肩を揺らす黒装束。いやだから何が楽し……もういいか。

「遊びは終わりだ、ペンシルワイヤー」

ちよつと自分でも恥ずかしくなるノリで言いつつ剣を相手に突きつける。

距離は幾らか離れている。

だが剣先から高速で射出されたワイヤーが二人を結ぶ線のように伸び、黒装束が反応する間も無く奴の左手に巻き付いた。釣りの様に柄をギリギリ握り、相手の動きを封じる。

「ジョディさんに頼まれたからには、お前をきっちり捕まえないとね」

相手の真似をして笑ってみる。多分上手く笑えてない。

と、突然黒装束がくつくと笑いを零した。

「ジョディねえ…何の話？私がジョディですよ」

頭巾の下でもニヤリと笑ったのが分かる。頭巾を捲るつもりなのか右手を上げている。

……………これだったか、嫌な予感は。

薄々感づいてはいたはずなのに。
男にしては線が細い事。

そして不自然なメガハツパイだか一時期流行ったファービーだか言う馬鹿馬鹿しいキャバクラ宗教。
全て僕等を仕留める芝居だった訳か…

「隙有り。」

黒…いやジョディの呟きが聞こえた。

気づけば僕の喉元に針が突き立っている。痛みは、無い。

……あ、ヤバ。手に力入んない。

右手は頭巾を捲ろうとしていたのではなく針を投げる為に上げてたらしい。

柄から手が離れ、無意識に膝をつく。そのまま手をつきもせずアスファルトの上に倒れる。朦朧とした意識の中頭の中だけでジョディの言葉が響いた。

「安心して下さい、ちょっとした麻痺毒です。貴方の種族は大した価値も無いですがいいよりはマ………」

最後まで聞き取る事は出来なかった。

ユレイ大騒動・完結編

……………て。

……………きて。

起きて。目を開いて。

「……………う」

酷い頭痛だった。一体どちらが天井かも分からないような、浮遊感にも似た頭の痺れに呻き声を漏らす。

左側頭部に冷たく硬い感触を感じるので、左を下にして床に寝かされているのだろう。

無意識に顔をしかめながらも、目を開いて辺りを見回す。
首を回しただけで脳がズキズキと痛む。

…何か、酔いつぶれた時みたいだ。

そこは、見た所倉庫だった。薄暗く、棚に囲まれ、辺りにはダンボールが積まれている。

漂う埃の匂いから、それらが相当放置されている物である事は何と

なく分かった。

よく見るとダンボールにはマツキーペンぽい字で

「十色工業」

と書かれている。

十色工業と言えば…確か、僕等がここに配属された直後に潰れてしまった会社だ。大規模な会社だったのか、ばつとむ町の郊外には倉庫やら工場やらの数多くが今でもそのまま放置されていると聞いた事はあった。

…つまり、居場所を特定する事が出来ないって事だ。

ばつとむ町郊外である事は分かるが…

ふと、今になって両手足を縛られている事に気がついた。

まあ痺れていたとしてもH-I-Rをそのまま放置するS-Tなんているわきや無い。

「…きつちり装備も外してくれちゃって…」

捕虜にされたソリッドよろしく、服や頭に巻いたバンダナくらいしか装備は無い。

少し手首や足首を動かしてみる。

当然というか何というか…キツチリ締めであり、ちょっとやさつとじゃほどけそうも無い。

辺りに刃物やらガラスの欠片やら、利用できそうな物も見当たらない。

「……………」

困った、力も入らないし頭も回らない。とりあえず脱出した方がいいにはいいはずんだけど。

ああ、誰か捕まえられてる人達が一人でもいればなあ…話聞けるのに。流石にH―Rを同じトコには入れないか。

……………ん？

そついや、僕は誰に起こされたんだ？

とか頭の中でぐるぐると思考を巡らせていたが、それは不意に中断させられた。

突然倉庫の扉が開いたからだ。

とりあえず目を瞑る。

いかにもまだ気絶したままです！的なオーラを全身から発するよう
念じ、自らの

「動」

の気配を殺す。

要するに死んだフリだ。

「おはよう御座います、よく寝れましたか？」

バレてました。

軽く舌打ちして相手に向き直り、皮肉たっぷりに言っただけ。

「…お陰様で気持ち良く眠れました」

「ははは、それは良かった。それなら目覚めなければ良かったですね？」

朗らかに笑い飛ばされた。どうやらジョディの面の皮は通せなかったみたいだ。

「…ジョディさんの顔じゃあない気がするけど…」

顔の布は取り払っていた。声もそうだが、顔も事務所で会った時のジョディのそれとは食い違う。

今のジョディはつるりとした見た感じ病弱そうな女性だ。少し若返った感もある。

ジョディがふん、と鼻で笑う。

「…これがお望みなのかしら？」

カチリと何かのスイッチが入る音。

と、瞬時に顔、声、体格に至るまでが大人っぽい艶のある女性のそれに切り替わる。

宇宙の闇ルート of 技術は日進月歩どころか秒進日歩…してやられました。こんな装置まで開発されてるとは…

「随分と甘い方ね、実は別人である事を期待していたのかしら？」

口調は変わっているが、言葉に含まれた棘は全く変わらない。

「甘い？何言ってるんだか…確認だよ確認。ジョディさんが正真正銘STなら、遠慮する必要は皆無だからね」

真顔で下から言い放つ。床に積もった埃が台詞に合わせて舞い上がる。

「…口を開けるのも苦しいだろうに、随分とやせ我慢するのね？…
…そっけんの嫌いなんですよ、HRRさん」

忌々しそくに顔をしかめて、頭にブーツをゴリゴリと押し付けてくる。

いや痛いから。

「何故、私がこんな手間を…何故、貴方達H-Rは…こんなにも邪魔なんだろう。今回だってそうだ。ちよつとした不注意で正体がバレて始末した女がたまたまあいう都合のいい宗教と職に属していて、上手い具合に仕事の取引が出来そうだと思ったら…」

「あんたの失敗から生まれたタナボタじゃん…っていたたたたっ！」
すつげ力入れられた…頬の骨折る気か。

「話は最後まで聞くべきですね。…順調のはずだった。あの赤マン ト男がこのジョディ…私になりすます前の女の知り合いでいなければ…。よりにもよってH-Rが友人ではバレるのは時間の問題…だからこんな手を打ちました」

一息にそこまで喋ると、一旦言葉を切る。
ジョディ…いや、厳密には違うか。偽ジョディは饒舌だった。
自分の計画が上手く行ってるかと思って調子に乗ってるのだろう。

「上手い具合に貴方達は分散してくれました、そしてこうして一人確保した…後は貴方を人質なりなんなりに使えば楽にカタがつきます」

そう信じて疑わないのか、実に愉快そうな笑みを浮かべている。

「……………プッ」

思わず笑ってしまった。

手が自由なら口を押さえてジャガーさんっぽくプスプス笑ってしま

うトコだ。

案の定偽ジョディの機嫌を損ねてしまった。顔を踏みしめるように力を込めながら言ってくる。

いやだから痛いって。

「何ですか？貴方、自分の立場分かってますか？」

…これ言つと怒りそうだけど…

「…まあ……あんたよりは」

面白いように偽ジョディの顔が歪むのが足の下からでも確認出来る。

「いや、分かってませんね。今この場でジョディさんと同じ場所に送ってあげましようか？」

分かりやすい事を言ってくる。

確かにこの状況、僕には一方的に不利だ。下手な事を言ってしまうえば本当にこんな所であの世に行ってしまうかねない。

だけど。

「…それは無いね。予感がしないから」

それは相手には意味不明の言葉だっただろう。
だが僕には深い意味がある。

大した能力も無い僕がこれまで生き延びてきたタネとも言える、自分でも良く分からない第六感だ。

「…何を言っているのか分かりませんが、貴方の力で今の状況を打開できそうにはありませんね」

ごもつとも。

僕は今きつたない床に手足縛られて寝かされてる訳だし。

「…僕の力では、ね。」

ぽつりと、一言。
と同時。

「滅牙、龍殺陣ッ！！」

耳をつんざく轟音と共に吹き飛ぶ扉。
舞い上がる粉塵。

その煙の中を突っ切って現れるのは薄暗くても鮮やかな赤。

もう、キター！って感じた。
勿論奴はじゅんぺまん。

「ここか！辺りの倉庫片っ端からぶっ飛ばしてきたけど…ってジョ
ディッ！？」

右手に漆黒の長刀を携え、予想通りのリアクションを返してくる。

説明している暇は無い。僕はすかさず叫んだ。

「じゅんぺまん！これはジョディさんの偽者だ！！」

「何い！？似すぎだろ！！」

「いや僕もビビったけどさ！とにかく別じ……っ」

喉元にナイフを突きつけられ、僕は思わず口を閉ざす。

「そこまでよ……じゅんぺまん。このお仲間がどうなってもいいの
かしら？」

ジョディの口調に戻った偽ジョディがじゅんぺまんに言い放つ。例
の艶っぽい声で。

「っ……っ」

たじろぐじゅんぺまん。

僕は躊躇せず言い放つ。

「いいから早く！」

奴も躊躇せず言い放つ。

「分かったア！滅牙ア、龍飛槍ツ！！」

言うと同時に腰溜めに構えた刀を突き出し、刃物のように鋭い一陣の風を巻き起こして飛ばしてくる。

「ちよつ、待……はええよ！！」

「何っ！？」

『ギャアアアアアア！！』

見事なまでの直撃。

不意を突かれたのか偽ジョディも何も出来ず、埃と段ボール、そして僕と共に吹き飛ばされていた。

＋＋＋

「……つたく、殺す気がッ！！」

「いや、加減してたつて。それに加減の為に予備動作小さくしたから隙も無くなった。効率良くな？」

此処は例のキャバクラ事務所。

偽ジョディをふん縛って搬送した後、適当な理由をキャバ嬢もとい信者の皆さんに説明しに来た所で、溜まっていた鬱憤を吐き出してしまった。

僕は全身絆創膏だらけ。偽ジョディが創傷塗れだったのを考えれば軽い怪我だけだ…

じゅんぺまんはヘラヘラと笑っている。何気にムカつく。

「いや効率とか言われてもなあ…」

隣の部屋では今、ひろきまんとレイが事情を説明している。どうやら黒幕はジョディさんで、警察のお縄になったと説明しているようだ。

これだと本物のジョディさんが悪者になってしまっけど、仕方ないかな…あそこまで似ていた偽ジョディを偽者と説明するのはちょっと難しい。宇宙に関して話してしまうとまたややこしい話になってしまう。

この団体、どうなってしまっんだろ…なんて言ったら、ひろきまんなら

「これは各個人の問題だ、これ以上私達が介入すべきでは無いと思う」

とか言うんだろうけど。

隣の部屋ではさっきからどよめきが途絶えない。

リーダー的存在を失ったのだから仕方ない話だろう。

「教祖に何て言ったら…」

「この支部どうなる訳？」

……支部だったのか…。

「そもそも、いきなり逮捕だなんて…私達に話もさせてくれないんですかあ？」

「そうよ！逆にあんた達の方が怪しくない？！」

「……それは…」

ひろきまんが口ごもる。扉越しに感じる黒いオーラはレイだろう。

その時、これまで静かだった奴が口を開いた。

「うつせエてめえ等ちったあ黙れコラア!!」

こっちに居ないと思ったら、たつくまんもあつちに居たらしい。

一瞬で水を打ったように静かになる。

「さっきから聞いてりやごちゃごちゃごちゃと……そんなに慌てる事かア？わーったわーったよ、言ってやらあ。お前等のジョディって奴は利用されたあげく殺されちまったんだよ！

こっちが氣い遣ってやってりやどこぞのIT企業みてえにぐだぐだ喚きやがって、草場の影からあの女も悲しんでんじゃねえのかコラア!!」

ズダン、と机を叩いたらしき音。

……なるほど、間違っちゃあいない。

僕は思わず笑みを零していた。

たつくまんは続ける。ひろきまんも止める気は無いようだ。

「お前等にとって奴がどんな女だったかは知らねーがな、奴が居なくても何とかやってくつてくらのノリで行けよ!……」
「たく、鬱

陶しつつの」

そう吐き捨ててこちらの部屋に押し入ってきた。

「ちっ……何で夜中にこんなトコでこんな事やってんだ。オレ先帰ってるわ」

苛々しているのを隠しもせず事務所を出ていく。

「……元はと言えばあいつが今行こうって言ったんだけどな」
隣でじゅんぺまんが口を開く。彼もまた、笑っている。

「……そういう事だ。死んでいるよりは生きていると思わせた方が
良いと判断して誤魔化そうとしていた。すまない」

ひろきまんの事だ、素直に頭を下げたのだろう。一呼吸程度の間が
あった。

「…君達がこれからどうするのかは私達がどうこう言える立場じゃないが、あの男が叫んでいた事も多少は心に留めておいてくれると嬉しいな」

そう言って、彼もまた此方の部屋に来る。

「……………行こう。」

異存は無かった。

こうして、今回の事件は幕を閉じた。

先に行ってしまったたつくまん以外のメンバーと、空が白み始めた街を歩いている。

ユーレイ騒動も偽ジョディが起こした事件をユーレイのせいにして誤魔化したものだろう。

皆の他愛ない話を聞きながらそんな事を考えていた。

…待てよ？

僕はユーレイが偽ジョディだと思っていた。だけど僕が窓でユーレイを見た時、偽ジョディは事務所に居たはずだ。

先に確認するために何らかの方法で窓に移動していたのだろうか？

それに……

「なあじゅんぺまん。どうして僕の居場所が分かったんだ？」

そうなのだ。通信機の発信源を辿れば分からない事も無いだろうが、
そういう機械はアパートに置いたまま。

連絡しない限り、じゅんぺまんが僕の居場所を知る術は無い。

「へ？どうしてってお前が連絡して来たんだろうが」

…は？

「いきなり通信機から遠くで何か鳴ってるような音が聞こえるな
とか思ったら何かお前戦ってるみたいだったし、暫くしたらお前、
郊外の倉庫の何処かに捕まってるみたいって言って来ただろ」

……？？

おかしい。おかし過ぎる。

僕は思わず通信機を取り出した。

当然スイッチはOFFだったけど…

刹那、声を聞いた気がした。

「有難う」

という、彼女の声を。

ユーレイ大騒動・完結編（後書き）

やっとこの話が終わりました…ちょこちょこ書いてたんですが、まだ読んでる方が居たら有難う御座いますです、はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0354a/>

たっくまん

2010年10月21日05時55分発行